

ソログープ童話集

春色

小石の冒険

ある町にとある道路がありました。車輪が道路から小さな石を一つ撥ね飛ばしました。

すると、小石は思いました。「この狭い場所に他の仲間と一緒に転がっていてどうなるって言うんだ——独立しなくっちゃ」。

走ってきた少年が、落ちていた小石を取り上げました。

小石は「旅行の希望が叶ったぞ。ただ行きたいと思ってただけで」と思いました。

少年は小石を家の中へと投げ込みました。

小石はこう思いました。「望んだら飛んでいた。思っただけで、何もしなかったのに！」。

小石は窓ガラスに当たりました。壊されたガラスは「君ってまあ、なんて悪戯っ子なの！」と叫びました。

小石は言いました。「自分で避ければ良かったんだ。僕のやることを邪魔するヤツなんて嫌いだよ。それぞれ自分の好きなことをするべきだっただけなのに、僕のモットーだからね」。

小石は絨毯の上に落ちました。そして思いました。「飛んだから、今度は横になってくつろごう」。

小石は掴まれ、元の道路へと放り出されました。

小石は他の石に向かって声を張り上げました。「やぁやぁ兄弟たち、ご機嫌よう。僕は豪邸に行って来たよ。けれど絨

「昔は世の中に向かっただけで良かった。でも、今はみんな、こぼれおち。僕も家でもうたふたふ。でも、世の中には好かれやしなかったよ。ごく普通の人たちにこそ、なりたいよね」。

腕白な子

ワーシャが白樺に登ったところ、ジャケットが破けてしまいました。
ママがジャケットに継ぎを当ててくれました。そしてワーシャに言いました。
「腕白な子はいつだって継ぎと一緒に歩いているわね」。
夕方、おじさんがやってきました。おじさんは眼鏡を掛けています。
ワーシャはおじさんを見ると、こう言いました。

「ママ、はあしたの晩ごはん、こらロウマした。

「ママ、ママったら！ おじさんこそ、腕白っ子だよ。だっておじさんの目には継ぎが当てられているもの。」

ひ弱な少年

ひ弱な少年がいました。

ハエにたかられないようにと、少年が生まれた時に鐘型のガラスが被せられました。

つまり少年はずっと、ガラスの容器の中で暮らして来たのでした。

少年は近くで白樺が揺れるのを見ました。

それが風のせいだとは少年は知りませんでした。か弱い彼は、風を知らなかったのです。

彼は白樺に言いました。「馬鹿な白樺め。揺れるんじゃない。折れてしまうぞ」。

風が止んだので、白樺は静かになりました。か弱い少年は喜んで言いました。

「言う通りにするなんて、こいつは賢い木だな」

黒色の素晴らしい眼がありました。ちらりと見て、眺め、それから尋ねました。
灰色の狡そうな瞳がありました。絶えず動き、決して真っ直ぐに相手を見ない瞳が。
眼が尋ねました。

「貴方は何をきょろきょろしているのですか？ 何を探しているのですか？」

駆け込んできた瞳は、へとへとに疲れながらも、答えました。

「ええ、こんな風にゆっくりと少しずつでは、駄目なのよ——許して、こうするしかないの——
分かるでしょう？」

そして、輝きのない厚かましい目がありました。じっと見据えて、見詰めるのでした。

眼が尋ねました。

「貴方は何を見ているのですか？ 何が見えるのですか？」

曲がった目が叫び声で言いました。

「貴方はよくもそんなことが言えますね？ 貴方たち何様？ 私たちは何様？ こうしてやる！
」

同じような美しい眼を探していた眼は、見つけることが出来ませんでした。だから眼は、眼を
閉じました。

ソログープ童話集

<http://p.booklog.jp/book/82770>

著者：春色

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkkate0303/profile>

ブログ：<http://kkkate0303.blogspot.com/>

出典

[БИБЛИОТЕКА РУССКОЙ КЛАССИКИ](#)

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82770>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82770>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ